魔法の背広

ディーノ・ブッツァーティ 作

ブッツァーティ読書会・稲垣豊典 訳

挿絵　大西三笠

チャプタ 1

魔法の背広

ディーノ・ブッツァーティ 作

ブッツァーティ読書会・稲垣豊典 訳

挿絵　大西三笠

洗練された着こなしというのは確かに素晴らしいものだが、私は、周りの人の服の仕立て具合が完全かどうか気に止めて見ることはまずない。

ところがある夜、ミラノのとある家でのパーティーで一人の男と知り合った。歳の頃四十、その服装の文句のない清楚な美しさで文字どおり輝いていた。

初対面で、誰だか分からなかった。紹介はされたが、例によって名前はすぐには覚えられなかった。その晩しかし、たまたま近くに居合わせ、言葉を交わす機会があった。礼儀正しく教養のある紳士と見えた。が、どこか暗い影があった。いささか大げさな親しみを

込めて -------- ああ、あの時、神さまが注意を他のことに逸らせていてくれたなら -------- その服装の趣味の良さに対してお世辞を述べた。更に厚かましくも、仕立屋の名前を聞くことまでした。

　まるでその問いを待っていたかのように、男は奇妙な薄笑いを浮かべた。

「ほとんど誰も知らないんですが、腕は確かです。気が向いた時にしか仕事しませんし、それもわずかのお得意さんだけ」

「だったら、私なんぞ・・・」

「おお、ひとつ試してごらんになれば。コルティチェッラという名前です。アルフォンソ・コルティチェッラ、フェッラーラ通り十七」

「高いんでしょうね、きっと」

「でしょうね。でも、本当のところよく知らないんですよ、私も。この服は三年前に作ってもらったんですが、請求書もまだ送ってこないんです」

「コルティチェッロさん、フェッラーラ通り十七、とおっしゃいましたね」

「そのとおりです」と名も知らぬその男は答えて、別のグループと交わるべく、離れていった。

　フェッラーラ通り十七番地に、同じようなたくさんの家に混じって一軒の家を見つけた。アルフォンソ・コルティチェッラの住まいも他のたいていの仕立屋の住まいと何ら変わり映えしなかった。ド

アを開けに来たのが彼だった。小柄な年寄りで、髪は黒かったが明らかに染めていた。

　意外なことに、渋らなかった。それどころか、お客になってくれるか心配そうだった。私は、住所を知った経緯を説明し、その出来栄えをほめ、一着仕立ててもらえないかと頼んだ。一緒に灰色のウーステッド地を選び、彼は寸法を取り、仮縫いには家まで来てくれることになった。私は値段を聞いた。そんなに慌てなくても、と彼は答えた、ご心配なさるにはおよびませんよ。なんと感じのいい男だろう、と最初は思った。しかしその後、家路につきながら、その小柄な老人が私の中に何か不快なものを残したことに気が付いた（恐らく、あのあまりにもしつっこく媚びるような作り笑いのせいだろう）。とにかく、二度と会いたいとは思わなかった。が、もう注文した後だった。そして二十日ほどして出来上がってきた。届けられたとき、ちょっと鏡の前で試してみた。完璧だった。ところが、どうしてだかよく分からないが、恐らくあの嫌な老人の記憶のせいだろう、着ようという気には全然ならなかった。その気が起きるまでに数週間が過ぎた。

　あの日のことは、私にとっていつまでも記憶に残るだろう。あの日は四月のある火曜日で、雨降りだった。その服 ------- 上着にズボンにチョッキ ------- を着込んでみて、新しい衣服に付きもののあの引きつった感じがどこにもなく、体にもぴったりでとても心地良かった。

私は上着の右ポケットにはまず何も入れない、書類は左ポケットに入れる。ほんの二時間ほどして、会社でたまたま右ポケットに手を突っ込んだとき、中に紙切れがあるのに気が付いたのはそのためである。ひょっとして仕立屋の勘定書だろうか。

そうではなかった。一万リラ札だった。

唖然とした。私が入れたのではもちろんない。かといって、仕立屋の後、その服に近寄る機会のあった唯一の人物である手伝いの女性からの贈り物と考えるのも馬鹿げている。あるいは偽札だろうか。明かりに透かして見、他のと比べてみた。本物に間違いなかった。

ただ一つ考えられるのは、コルティチェッラがついうっかりしていたということだ。仮に、誰かお客が彼のところへ月賦を払いに来たとする、その時彼は財布を持っていなかった、それで、そのお札を放っておくわけにもいかず、私の背広のポケットに突っ込み、マネキンに掛けたままにしておいた。あり得ることだ。

秘書を呼ぼうと、呼び鈴を鳴らした。コルティチェッラに手紙を書いて、私のものではないそのお金を返そうと思ったからだ。ところが、どうしたはずみか自分でも分からないのだが、またポケットの中に手を突っ込んだ。

「どうなさったのですか。ご気分でもお悪いのですか」、ちょうどその時入ってきた秘書が尋ねた。死人のように真っ青になっていた

に違いない。ポケットの中で指がまた一枚の紙切れの縁に触っていた。ちょっと前まではなかったはずだ。

「いや、いや、別に、ちょっとめまいがしただけだ、この間から時々起こるんだ、少し疲れているんだろう。いや、よろしい、手紙を一通タイプで打ってもらおうと思ったんだが、また後にしよう」

秘書が出て行ってから、ようやくその紙切れを取り出してみた。またしても一万リラ札だった。そこで、もう一度試してみた。三枚目が出てきた。

心臓がどきどきした。子供たちに話して聞かせはしても、本当とは誰も信じていないあのおとぎ話の世界の出来事にいつの間にか巻き込まれた、という感じだった。

気分がすぐれないと言い訳して会社を退き、帰宅した。一人になる必要があった。幸い、家事をしてくれる女性はもう帰った後だった。ドアを閉め、ブラインドを降ろした。そして、ポケットからお金を次から次へとものすごい速さで取り出し始めた。いつまでも尽きそうになかった。

今にも奇跡が終わるのではないかと恐れつつ、神経をぴりぴりさせてその作業を続けた。夕方から夜中かけて、何十億という額になるまで続けていたかったのだが、いつしか力尽きた。

目の前には驚くべきお札の山ができていた。絨毯の詰まっていたトランクを空にし、その底に少しづつきちんと束にして数えながら積み上げた。五千八百万はたっぷりあった。

次の朝、私が服を着たままベッドに横たわっているのを見つけてびっくりした家政婦に起こされた。笑ってごまかし、昨夜いささか飲みすぎ、そのまま眠ってしまったのだと言い訳した。

もう一つの心配は、せめてブラシを一つかけるから服を脱ぐようにと家政婦が催促したことだった。

すぐ出かけなければならないので着替えている暇はない、と答えた。そして、もう一着同じような生地の服を買いに洋服屋に飛びこんだ。それを家政婦に渡しておくつもりだった。「私の」、数日のうちに世界の大金持ちの一人にしてくれるあれは、安全な所に隠しておくのだ。

夢の中に生きているのか、幸福なのか、それともあまりにも大きな運命の重みに圧し潰されそうになっているのか、よく分からなかった。道を歩きながらも、レインコートの上からたえずその魔法のポケットの辺りを撫で、そのたびに安堵の吐息を漏らした。安心しろというように、かさかさと紙幣の音が布地の下から返ってくるのだった。

ところが、ある奇妙な符号が私の錯乱した歓びに水を浴びせた。その日の朝刊に、前の日にあった強盗事件が大きく報じられていた。ある銀行の現金輸送車が、支店を回ってその日の入金を本店に運ぶ途中、パルマノーヴァ大通りで四人組の強盗に襲われ、金を強奪された。人々が寄ってきたので、ギャングの一人が逃げようと発

砲した。そして通行人の一人が死亡した。それはともかく、とりわけ私に衝撃を与えたのは、その奪われた金の額だった。まさしく（私のと同じように）五千八百万だった。

私が得た思いがけない富と、ほとんど同時に起こった強盗事件との間に何か関係があり得るのだろうか。考えるのも馬鹿げているようだった。それに、私は迷信かつぎではない。とはいっても、その事実は私をひどく狼狽させた。

人は持てば持つほどなおさら欲しくなるものだ。それまでの質素な暮らしぶりからすれば、私はもう十分に金持ちだった。が、贅沢三昧の暮らしという蜃気楼に目が眩んでいた。その夜また、例の作業に取りかかった。今度はもっと落ち着いて、神経も張りつめずに進めた。こうして、一億三千五百万が積み重なった。

その夜、目を閉じることができなかった。危険の予感だったのか、あるいは労せずして夢のような幸運を手にした者の煩悶だったか、それとも漠とした後ろめたさだったのだろうか。空が白むやベッドから跳ね起き、服を着るのももどかしく新聞を買いに走った。

目を通して、息を呑んだ。原油タンクから発した大火で、都心のサン・クロロ通りの建物が半焼していた。なかでも、大きな不動産会社の金庫が炎に呑まれたのだが、その中には一億三千五百万以上の現金が入っていた。その火事で、消防士が二人命を落としていた。

さてここで、私の犯罪を一つ一つ数え上げねばならないのだろうか。そのとおり、あの背広が私に進呈してくれる金は、犯罪や血、絶望や死から来ること、地獄から来るのであることが今となっては分かったのだから。とはいえ心の中では、一笑に付していかなる責任をもそこに認めることを拒むよう理性がそっと囁くのだった。となるとまた、誘惑が頭をもたげ、手がポケットの中に滑り込み------- かくも簡単なことなのだ ------- 素早くむさぼるように、指が次々と新たなお札の縁を握り締めるのだった。金、聖なる金よ！

古いアパートは（目立つといけないから）引き払わず、またたく間に大きな別荘を買い、高価な絵を蒐集し、高級車を乗り回し、「健康上の理由」で会社を辞めてからは、素晴らしい女たちを連れて世界中を飛び回った。

背広から金を取り出すたびに、この世に何か罪深く痛ましいことが起こるのは知っていた。とはいっても、相変わらず論理的な裏付けのない漠然とした意識にすぎなかった。その間にも、新たに金を手にするたびに、良心は荒み、ますます卑しくなっていった。ところで、あの仕立屋は？勘定をしてくれるよう電話したのだが、誰も出なかった。フェッラーラ通りに尋ねてみると、外国に移住したとのことだったが、どこかは分からなかった。つまり、全てが、いつの間にか私が悪魔と契約を交わしたのだと証明しようとしていた。

果ては、私の長年住みついていたアパートで、ある朝、年金暮らしの六十歳の老婆がガス自殺しているのが見つかった。前の日に降

ろした（そして私の手に入った）三万リラを失くしたがために自殺したのだった。

　たくさんだ、もうたくさんだ！奈落の底にまで堕ちぬうちに、あの背広を始末する必要があった。ひどい事が続くだろうから（このような誘惑に、いったい誰が抗しえよう）、もちろん誰にもやらずに、どんなことがあっても隠滅せねばならなかった。

　私は、車でアルプスの人里離れた谷に着いた。草原に車を残して、森の中に分け入った。人っ子一人いなかった。森を抜け、モレーンの岩場にまで行った。そこの巨大な岩の間で、リュックサックからあの呪われた背広を引っ張り出し、石油をかけて火をつけた。数分後には灰しか残らなかった。

　と、最後の炎が揺らめいたとき、背後で ------- 二〜三メートル離れた所だったようだ ------- 人の声が響き渡った。

「もう遅い、もう遅すぎる！」

　ぞっとして、私はぐいと後ろを振り向いた。が、誰もいなかった。そいつの居場所を突き止めるべく、岩から岩へと跳んで捜し回った。誰もいなかった。石以外は何もなかった。

　恐怖に身をおののかせながらも、ほっとして谷にたどり着いた、やっと自由だ。その上、幸運にも金持ちだ。

　ところが、草原には車は見当たらなかった。しかも、町に戻ってみると、「売却用市有地」と書いた立て札が立っていた。銀行預金

は、なぜか全部なくなっていた。たくさんの金庫からは、分厚い株券の束も消えていた。古いトランクの中は埃だけだった、埃以外は何もなかった。

今、やっとのことで私は働き始め、なんとか暮らしを立てている、何より不思議なのは、私の突然の零落を誰も不審に思わないことだ。

まだすっかり終わったわけではないことは分かっている。ある日、ドアの呼び鈴が鳴り、開けに行くと、卑屈な笑みを浮かべたあの破滅の仕立屋が立っていて、最後の支払いを請求するだろう、ということも分かっている。